

対談・『国境の南、太陽の西』 (IV)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 英行, 高野, 圭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007643

対談・『国境の南、太陽の西』(Ⅳ)

酒井英行
高野圭子

Ⅳ 記憶／物語の中の女——島本さん

酒井 それでは、これから、「記憶／物語の中の女——島本さん」というテーマで、話を進めていききたいと思います。この島本さんの描き方っていうか、語り方っていうのは、たとえば、夏目漱石の『三四郎』の、三四郎の視点を通して、美禰子を語るっていう方法と似ていると思うんですけど。三四郎の視点で美禰子を語るから、美禰子の内面は断片的なものになり、彼女の台詞とか、彼女の身振りとかを通して、三四郎、そして、読者は、美禰子の内面を想像するしかないわけです。この『国境の南、太陽の西』も、始の語りによつて、島本さんを語り出す。ですから、作中人物である始もそうでしょうけど、我々読者も、島本さんという人をトータルにとらえることは、とても難しく、島本さんという女性をどう捉えればいいのか、なかなか分かりにくいんですけど。『三四郎』における美禰子よりも、なおかつ、

この島本さんというのは、始の頭の中に閉じ込められているような感じで、読者は、島本さんという女性の実像を知ることが余計に難しい作品であると思うんですが。で、その島本さんが小学五年生のとき転校してきて、「親しい友だち」になり、十二歳のときに、手を取り合うわけです。島本さんが始の手を握る、「こっちに早くいらっしやいよ」というふうには始の手を取り、二人は、十秒ほど手を繋いでいたのですが、始にはそれが十分くらいにも感じられたわけです。この時握った島本さんの手の感覚が、始の中で、島本さんの存在を保証する唯一のリアリティ、現実感覚です。ですから、島本さんは、始が作った幻想なのかどうか分からない女性なんです、その辺、どうですか。

高野

あの、最初の、第一章が、その、「僕」の島本さんとの記憶で始まっているわけなんです、……

酒井

それは、だから、クロニクルっていうか、年代記で、始が、自分の三十七年ぐらいの人生を、年代的に、早い順番に語っていくっていうことで。

高野

はい。

酒井

それを、小学校五年の、島本さんが転校してきたところから語るっていうことですね。

高野

ええ。で、それが、唐突に始まるんですね。物語の初っ端に、自分が一人っ子だということと、たった一人の友

だちが、同じ一人っ子の島本さんという少女だっということが、語られる。その後は、中学のときは、ほとんど何もなくて、高校になってイズミの話があつて、それから大学生、社会人になって、そして、有紀子と出逢って結婚、っていうふうには、足早に、彼の今までの人生が語られて。それから、現在の、青山でジャズバーを経営していて成功している自分のところに、島本さんが訪ねてくるっていう、メインのストーリーが始まるわけです。島本さんとの二度目の出会いがあつて、それからのことが。この小説では、この島本さんとの再会後が、大部分で、長々とあつて、だいたい三分の二ぐらいが、その語りだと思っただけです。

酒井 そう、三分の二はあるね、……

高野 ただ、島本さんの人物像を、思い浮かべると、この小説の中では、やっぱり、小学校五年か六年のころの「僕」と、一年ちょっと友だちだった足の悪い少女が、島本さんとして浮かんでくると思うんですね。大人になってからの、シックで大人っぽい島本さんよりも、小学生の島本さんのほうが、強い印象を残すんじゃないでしょうか。私は、この、始の記憶の中の島本さんが、この小説全体の中心にいると感じるんです。その、この小説の芯には、性的な関係を結ばない、あからさまな欲望にさらされていない男女がずっといるみたいな感じですよ。だから、物語は、確かに、三代の男女の異性愛のものなんだけれど、最初から、三十六歳の「僕」の前に、いきなり、同じく三十代半ばの島本さんが、登場するっていうふうには描かないで、この、小学生のときの二人のエピソードが、冒頭に置かれたっていうことが、すごく、この小説の魅力になっていて、面白くしているのではないのでしょうか。

酒井 今、言ったことで、たとえば、書き方として、三十六か七で、青山で店を経営していて、家庭もある主人公の前に、たとえば島本さんという女性が来て、……

高野 「実は、彼女は、かつて……」みたいな感じで、……

酒井 「実は、……」っていうような感じで、回想で、今の作品の一章のところの、スタートのところを語るっていうふうになると、付け足しっていう感じで、……。最初に書くか、後で回想のようにするか、まあ、起源に、その小学校五、六年のころのことがあるというのは、変わらないにしても、読者に与えるインパクトっていう意味では、……

高野 はい。

酒井 高野さんが言ったように、最初に、まず、小学校五、六年のころの始と島本さんを書いている。いかにも、これが、起源、ジェネシスという感じで。読者にも強烈な記憶を刻もうとして、春樹がこういう順序にしているわけだから、

いかに、大事かっていうことだけど、……。で、今、高野さんが言ったところで、作品としては、でも、三分二ぐらいを費やして、……。どこが、この作品の現在かというのは、難しいとしてもですよ、……

高野 ええ。

酒井 まあ、三十六歳か三十七歳の始が、青山で店を経営している時間を、現在と捉えると、小学校五、六年のころの記憶が鮮明すぎて、目の前に現れた島本さんというのは、どこかその残像のようですね。小学校五、六年のときの島本さんの重みというか、リアリティに比べると、どうなんですかね、その、……。経営している店に最初に、島本さんが来た日に、「僕は幻のようなものを見ていたのかもしれない、と思った」という文章があつて。

高野 はい。

酒井 島本さんが店を出て行つた後、通りに出てみたら、彼女はもうそこにいなかった、その時、始はそう思うわけです。

高野 「僕は自分がもう一度十二の少年に戻ってしまったような気がした。」って、言っていますね。

酒井 うん。だから、これが、三十六歳のときで、十二歳の少年のころつていうと、二十五年前つていうことですからね。

高野 四半世紀ですね(笑)。

酒井 四半世紀(笑) ぶりに現れた島本さんを送っていったときに……。「幻のようなものを見ていたのかもしれない。」つてね、……

高野 はい。はつきりと、ここで、現実感の無さが、書かれています。三十六歳のときに現れた島本さんは、すごく綺麗だけど、でも、存在としては、おぼろげですよ。

酒井 その出会いを、「幻のようなものを見ていたのかもしれない」つて言い、そして、雨が降っているのを見て、「僕は自分がもう一度十二の少年に戻ってしまったような気がした。」つて言つて。どうということなんですかね、……。島本さ

んが店にきて、三つしか席が離れていない椅子に座っていたのに、始は、それが誰であるかまったく分からなくて。

高野 はい、そうですね。

酒井 ずいぶん綺麗な女性だと思うだけで、かなり長い時間、それが島本さんだと気がつかなかったということを考えると、十二歳の少女である島本さんのイメージが頭に焼き付いていて、二十五年後の、三十六歳になっている大人の島本さんは、たぶん、イメージできていないのですね。ですから、島本さん、島本さんって、始は、繰り返し、島本さんを人生の節目のときに回想するんだけど、それは、やっぱり、十二歳の島本さんだったのですよね。今、現在には存在しない、小女の島本さんを、島本さんとして追い求めていた……。だから、たぶん、大人の島本さんっていうのは、始にとってあまり意味がないというか、……。

高野 私も、ここは、すごく面白い書き方だなんて思っていました。目立つ女性だったとか、綺麗だったとかって、書いてるのに、でも、「僕」は注意を払わなかったということ、わりと、行数を費やして書いています。

酒井 うん。

高野 もう、十一時近くになって、その女性が、お店に来てから、一時間とか二時間とか経ってから、彼女が「素敵なお店ね。」って、まず「僕」に言っ、それで、なんか、……。

酒井 ビビっとくるんだよね。

高野 吸引力が云々って言っ。島本さんだっ、ようやくそこで、正面から見て、気がついたっ。

酒井 うん。

高野 なんだか、曖昧ですよね。本人が、「島本です」って言っ、「あ、島本さんだ」って、いう感じで、……。やっぱり、二十五年間っという時間が過ぎていて、お互い、まったく交流がなかった期間、空白があっ、それで、今、始

の目の前にいるのが、あの島本さんだという、現実感はありません。私は、極端に言えば、その女性が、本当に島本さんかどうかは、あんまり重要ではないんだらうなって、そんな感じを持ちました。島本さんという、名前を名乗る女性である、っていう、ただそれだけの存在みたいで。

酒井 ああ、うん。

高野 でも、始くんは、その、島本さんと名乗る、生身の女性の登場によって、現実と、記憶や幻想の中で、対話していた島本さんとの境目を、見失ってしまったというか、踏み越えたというか。

酒井 気がついたら、カウンターに女性が座っていて、綺麗な女性がいるなって思って、見ているっていう設定になっていきますね。一人の女性が、店のドアを開けて、歩いてきて、カウンターに座る、という一連の動きを始の視線が追っていたら、「あ、島本さんだ」と気がついたのでしょうか。小学生の時のようには左脚を引きずってはいなかったしろ、その技巧的な歩き方によって、「あ、島本さんだ」って……。

高野 はい。

酒井 その時からおよそ十年前、二十八歳の始は、年末の渋谷の雑踏の中でさえも、ぱっと島本さんをピックアップできちゃったわけだから。その歩き方の特徴によって。

高野 ええ。

酒井 歩き方を指標にしないと、たぶん、島本さんか、他の人か、分からなくて……。始の店に来た日でも、島本さんが嘘をついて、「私、山本です」とか（笑）言ってしまったえば、島本さんが至近距離にいながら、気がつかないままに終わっちゃっていることも、あり得ると言うことは、……

高野 あり得ますね（笑）。

酒井 ポイントは、「脚の悪い女の子」ですね。顔とか、スタイルとか、声とかよりも、「脚の悪い女の子」という特徴が重要事項ですね。「脚が悪い」ということが、やっぱり、この作品では、キーポイントになっていて。

高野 はい。

酒井 ですから、小学校の時に、転校してきた島本さんに、「脚が悪い」という特性が備わっていなかったならば……。「脚が悪い」少女じゃなかったら、たぶん、友だちになってないんじゃないのか、……。この作品では、ちよつと島本さんから逸れるそうですけど、随所に「脚の悪い女の子」が、……

高野 出てきますね。

酒井 「脚の悪い女の子」である島本さんと別れたのが十二歳。会社に入って二年目、始が二十四歳の時に、同僚からダブル・デートに誘われて、薬局の娘に会うことになるのですよね。その頃の始は、「ダブル・デートとかブラインド・デートといった類のものにはうんざりしていた」わけですから、その女性が「脚が悪い」ということを知らされなかったならば、デートには行かなかったはずですよ。しかし、同僚から、「脚の悪い女の子」であることを教えられたら、どうしてもその誘いを断ることができなくなったというのですね。

高野 そうなんですよね。

酒井 それこそ、吸引力っていうか。

高野 はい。

酒井 「脚の悪い女の子」だって聞いただけで、会ってみたくなくなったって、……。それで、ダブル・デートに行つて、気に入っちゃった。というか、「懐かしさに似た心持ち」を抱いたわけです。それが、島本さんと別れて、十二年目。

高野 そうですね。

酒井

でも、まあ、間に、島本さんに通底する「自然に人の心を引きつけるような素直な温かさ」を持ったイズミという高校生の時のガールフレンドを入れれば、始の心を動かす女性との出会いに十二年間のブランクはないんですけど。しかし、「脚の悪い女の子」との出会いということでは、十二年間の空白があります。そして、次が二十八歳の時っていうことは、四年後ですけど、渋谷の雑踏で、島本さんと同じほうの足を引きずりながら歩いている女性を目撃して、追跡したのですが、そのときは、それが島本さんだと確信が持てなかったわけですよ。でも、その女性を介して、と言いますか、その「脚の悪い女の子」を中継して、……、それで、今度は、三十六歳のときに、「脚の悪い女の子」が店にやって来た。しかし、彼女が歩いているところを、見ていなかったせいもあって、島本さんがすぐ側にいるのに、気づかない。

高野

足が治っているっていう、設定になっているんですよ、ここがまた、……

酒井

四年前に手術して治したってね。骨を削ったり、継ぎ足したりする大変な手術だったと。「どうしてあのとき、あなたは私のあとをつけたりしたの？ 八年ばかり前のことだったと思うけれど」と島本さんが言っていることから、渋谷の雑踏の中を追跡した女性は島本さんだったわけですが、二十八歳の彼女は、小学生の時と同じ「脚の悪い女の子」の歩き方をしていましたね。これは不自然な設定だと思えるのですが……。体操の授業に出ず、ハイキングなどの日は欠席するほど、「脚が悪い」のに、治そうとした形跡がないのですよ。四年前に手術して治したということは、三十二歳までその不自由な足で歩いていたということですよ。なぜ、三十二歳になって、治そうと思ったのか、説明されていません。島本さんの謎の部分ですが、渋谷の雑踏で、始の頭の中に、自分の存在感を植え付け直すために、二十八歳の時までは手術しないでいたのだと、深読みしたくなります……。三十二歳の時に手術して治したというのが、なんだか不自然で。

高野 はい。

酒井 島本さんは、親が結構裕福で、ちゃんとした家庭に育っていますので、まあ、転校する前、始くんと出逢う前に、治していたほうが自然なような……。ここも、始に「脚の悪い女の子」として出現するために、手術しなかった、という設定のような……。

高野 まあ、医学の進歩とか、そういうことかもしれないですけど（笑）……。

酒井 ああ、医学の進歩ね（笑）。

高野 でも、確かに、ちよつと、始くんが、気がつかなかったっていうのは、やっぱり、足が悪くない、治っているっていうのが、大きな理由になっていると思います。足が悪い、足を引きずるような女性が、店に入ってきたら、きっと始くんも、すぐそこで、たとえ島本さんでなくても、目がいったと思うので。私は、始が、三十六歳のとき、再会した島本さんが、足が治っていたっていうのは、とても大きなことだと思います。たぶん、春樹が一番始めに、小学校のときの島本さんを、明らかに足が悪い少女として設定して、あの、誰が見ても足が悪い、靴も特注で注文して作っていたらうっていうぐらい、……。

酒井 そうですね。

高野 それほどの、欠落というか、刻印というか、そのように島本さんを設定しておいて、そして、二十五年後の島本さんは、足が治っている状態にして、登場させた。これは、大きな意味があると思います。

酒井 三十六歳で、目の前に現れた島本さんの足が治っていたっていうことは、その時既に、島本さんが理想の女神ではなくなっていたということでしょうか。始が心に焼きつけている十二歳の島本さんは、春樹の作品によく出てくる、一〇〇パーセントの女の子っていう、理想的な唯一絶対な女性としてですね。一〇〇パーセントの女の子の徴（しる

し)が、「脚が悪い」少女っていう設定で。その三十六歳の島本さんの足が治っていたっていうのは、もう、実は、唯一絶対的な島本さんではなくて、AさんでもBさんでも、交換可能な相対的な女性でしかなかったことだろうと思います。それなのに、始が、絶対的な女性として追いかけるのは、それは、やっぱり、十二歳の少女である島本さんに心が固着しているからだと思います。三十六歳になって出現した島本さんは、高校生の時に付き合っていたイズミであり、今、一緒に生活している有紀子であり、……。幼稚園に娘を迎えに行けば、渋谷で追跡した島本さんの鏡像のような、赤いコートを着て、大きなサングラスをかけた女性がいて、世間話をするようになり、島本さんとの差異は失われているのですね、実質的には。歩き方の差異だけで、かろうじて、始は、幼稚園で出会う女性と島本さんを区別することが出来ているようで……。要するに、三十六歳の島本さんは、相対的な女性、つまり、現実的な女性であったのではないのでしょうか。

高野 そうですね。始が、彼女は島本さんだと、認識していることによつてのみ、彼女は、島本さんとして、存在し得る、ということだと思えます。島本さんを島本さんたらしめている、しるしが、その女性には見られないわけですから。

酒井 島本さんだと思っている島本さんには、しかし、同一性があるのでしょうか。始が、島本さんと現実世界で会わなくなつて、中学、高校、大学、という学校時代、それから、社会人になり、有紀子と結婚してからも、ずっと、二十五年間、いろいろな局面で、思い浮かべていた島本さんと、現実目の中にいる島本さん……。始が島本さん島本さんと思つているのは、十二歳の時に、頭に焼きつけている島本さんであり、それは言わば島本さんのイメージに過ぎなくて。店に出現した足が治っている島本さんっていうのは、さっき話にでたように、「私、山本です」って、言つていたら、主人公は島本さんとは分からなかつたでしょう。つまり、彼の中で、十二歳の島本さんと、今、目の前にいる島本さんとを繋ぐもの、同一性は、たぶん、失われているのだと思うんですね。

高野 ええ。もう、始くんの思いだけですわね。この人は島本さんだ、僕の大事な島本さんだっていう。

酒井 たとえば、高野さんが、「島本です」って言えば（笑）、……

高野 はい。私が、「私、島本です」って、言えば、始くんは、「そうかな、……」って（笑）。

酒井 そうかな、……って（笑）？

高野 だから、決して、十一歳のころの島本さんと同一ではないですよ。完璧には、重なりません。大人の女性になっているし、何より、足が治っていますから。この三十六歳の島本さんの、出現は、始くんが、島本さんを求めているからだって、私は思います。島本さんに助けてほしい、っていうか、今島本さんが必要だっていうふうに、あの、始くんが、そう望んで、それで、島本さんが現れたんだろうって、思います。

酒井 そこがまあ、鶏が先か、卵が先かで、難しいところですよ、この作品は。

高野 はい。

酒井 つまり、島本さんが、「でもあなたはもし私に出会わなかったなら、あなたの現在の生活に不満やら疑問を感じることもなく、そのまま平穩に生きていたんじゃないかしら。そうは思わない？」と言っているように……。

高野 ええ。

酒井 三十六歳の始の心の空虚さっていうか、欠損感・欠如感、満たされないものがあるから、島本さんという幻影、絶対的なイメージを造り出しちゃったというのが、島本さんの出現ということだと考えるのか。

高野 そうですね。

酒井 絶対的なものが、現れちゃったから、現実の生活の諸相が色褪せた、たとえば、有紀子と暮らす家庭生活が色褪せちゃったのか。それが、この作品では、分からないところですよ。

高野 ええ。そこは、読みが、分かれるところだと思えます。

酒井 高野さんは、前者のほうの、現実の三十六、七の始が、現実をうまく乗り切れなくなったときに、タイミンク良く島本さんが来てくれたって、考えるわけですね？

高野 うーん、そうなのかな……。私は、まず、最初に、イズミが現れて、……。それから島本さんっていう順序で考えているので。あの、さつきまで話していたように、三十代半ばになった、始くんに、高校時代の同級生が、イズミのニュースをもたらすという形で、まずイズミが登場します。そして、それを補完するというか、パラレルのような形で、島本さんが現れたんだって、考えています。それで、始は、完全に現実からさまよい出たんだろうって思うんですね。

酒井 高野さんは、島本さんの存在理由を逆説的に言っているのかな、作品の終りまで読めば、島本さんがイズミを補完する女性として描かれていることは分かるのですが……。イズミは、高校時代のガールフレンドで、素敵な女の子との素敵な思い出に耽る、っていうんじゃないかって……。あの素晴らしい少女だったイズミに愛された俺って、たいしたもんだ、っていうような(笑)、ナルシズムじゃなくて。

高野 ええ(笑)、そうじゃなくて。

酒井 自分が傷つけた存在として……

高野 はい、自分を罰するもの、糾弾するものとして、ですな。

酒井 では、島本さんというものは、……

高野 弱くて罪深い自分を、あるいは、汚い、醜い自分を、補い埋めてくれる存在でしょうか。もしくは、そういう、許し難い現実の自分を、どこかへ連れて行ってくれるような、……。あのそれは、死の方へ、ということですけど、そ

う言っているのかどうか、……、あの、まあ、助けてくれるっていうことでしょうかね。始くんにとっては、救済。

酒井

つまり、イズミは、始のマイナス面、始の悪い点をあらわにする存在だが、島本さんは、有紀子との日常生活の空虚感、あるいは、始自身が単独者として抱える空虚感・欠如感を埋め合わせようとしてくれる、始を救ってくれる……。しかし、高野さんが、島本さんが始を死のほうへ連れ去る、と言っているように、島本さんはイズミに重なる存在でもあるのでしょうかね。

高野

はい、イズミとも重なると思っています。有紀子とも、もちろん重なりますし。始が、島本さんを求めた、または、島本さんが始の前に現れたとも言えますけど、それは、有紀子とのことが、確かにありますよね。あの、最後のほうで、「役割をただ演じていただけだ」という記述があるように、二人の結婚生活は、表面的にはすごく幸せで、社会的に成功していて、平穏な暮らしを送っているように見える。でも、実は、始が抱えている、ある種の空虚感とか、罪悪感みたいなものもあるでしょうし、そういうものが、この時期に、どんどん肥大化してきて、もう目を逸らせていられないほどになってしまった。それは、始が、有紀子と、きちんと関わりあってこなかった、二人の関係性の問題っていうことも、もちろん原因なんですけど、それだけではなくて、有紀子との生活は、始の自意識や価値感を、すごく揺るがしていますよね。彼は、この資本主義の、現実の社会で、しっかりとお金儲けをして、アルマーニとか(笑)、着ているにもかかわらず、そこは、自分の居場所ではないように、自分のしていることに、満足とか幸福感とか持っていないです。始は、端から見れば、とっつもうまくやっていて、社会に適応しているように見えるのに、それは、自分がちゃんとやっていることなのに、こんなんじゃない、こんなはずじゃないって、ずっと感じている。そういう、まあ、いわゆるアイデンティティが、確立されていないというか、ナイーブというか、……。その、揺れ動いている始が、そろそろ、四十歳を前にして、このまま、僕、ナイーブなんです、……。なんて(笑)、言っていられないとこ

ろまで来たんだらうって思います。幻影や記憶の中に逃げこんで、現実をやり過ぎすのではなく、実際に、今を生きている、生身の自分を、現実の社会の中で、他者の視線にさらされている、その自分自身を、自分として、受け入れなければならぬ時を、むかえたってということじゃないでしょうか。それが、嫌なら、人生を降りるしかない、っていうぎりぎりのところなんじゃないですかね、三十代半ば過ぎて。

酒井 そうですね。始まっている人は、中学に上がるとき、島本さんと別れたあと、高校時代はイズミっていうガールフレンドがいたんだけど、大学に入っても、教科書会社に入っても、ガールフレンドには結構恵まれていて、本当に孤独だったんじゃないけど、語りでは、さかんに、自分は一人で孤独だったって言っています。

高野 はい。

酒井 だけど、始まっているのは、一人で孤独でいるのが、決して嫌じゃなくて。

高野 そうです。

酒井 むしろ、自分が研ぎ澄まされたように自分であるっていう。

高野 ええ。ちよっと、優越感をもって、そう言っていますよね。

酒井 聴く音楽の一音一音が、読む本の一行一行が、体にしみ込んでいくのが感じられた、とか言って。すごく、自分が自分である、自分らしくあるっていうことを、誇らしく思っている面があつて。

高野 はい。

酒井 それが、有紀子という現実の女性と結婚して、日常生活を営む。そのとき、一人でいられなくなったときに、この人の、自我同一性が揺らいで、自我の輪郭が崩れてきたときに……。しかも、それが、子どもが、……、一人目が生まれたあと、イズミの噂を聞いて、たぶん、島本さんは、もっと日常生活が安定して、有紀子との家庭が二人の娘に

恵まれて順調にいつているときに、始は、独身時代にあったような、自分が自分であるっていう、その自我同一性が揺らぎ、……。孤独では無くなったかもしれないけど、どこからどこまでが自分で、どこからが自分じゃないのか、っていう区別さえも無くなったときに、島本さんという女性が必要になった。小説ですから、その、始の空虚さっていうか、SOSがわかったみたいに、島本さんがやって来た。書くほうの手口としては、そういう主人公を救うために、島本さんという女性を、登場させたんでしょね。

高野 そうですね。

酒井 始が発しているSOSを、島本さんが、超能力でキャッチした、というのは、あまりにもSF的なので……。まあ、

自我同一性が揺らいでいる始の前に島本さんがやって来る、さて、彼はどうするかって、……

高野 はい。しかも、その島本さんは、始が、「あ、島本さんだ」って気がついたから、もっと言えば、始めが、そう名付けたことよって、その女が島本さんになった、と言えると思うんです。そういう仕掛けによつて、始と島本さんという関係性というより、始の、非常に個人的な願望というか、欲求、……、彼女を求める気持のほうで、突出していることが明らかにされています。島本さんのほうから、とつても会いたかったとか、助けて欲しいとか、そういうのは、ほんと、書かれていないですよ。ただ、始が求めるから、それに応じて、彼女が始を導くっていう構図になっている。酒井 ほんとは、島本さんのほうが、助けてもらわなければならぬような境遇、結婚しているのか、いないのか分からないのですが、子どもを産んだ、でも、一年前に死んで、灰にしてとか、という不安定な境遇にいて、……。父親は死んで、お母さんとは不仲で、……

高野 会っていないって、言っていますね。

酒井 会っていないとかってね。島本さんのほうが、ずっと、なんだか、問題のある人生を送っているみたいなんだけど

も。島本さんは、どちらかというところ、救済する側、というのでもないでしょうけど、……。始は、それを求めているんでしょね。有紀子とは違う救済者。有紀子は、始にとつて、いわば、聖母マリア。母親に甘えるように甘え、守ってもらえ、愛してもらえ女性として、有紀子と生活を共にし、島本さんは、……。夢を見させてくれればいいわけかな、……。だから、島本さんが店に現れてから、もし、たとえば、毎日現れる、切れ目無く現れちゃったとしたら、たぶん、全体の三分の二の分量を使って語る島本さん探し、追っかけというメイン・テーマは成り立たないですよ。島本さんが、一回目に来てから、次に来るのは何ヶ月か後ですし、次はいつ来るかって聞くと、しばらく経ってからと言つて、曖昧にしたり、実際何ヶ月も来なかつたりとか。あるとき、来だしたら、昼間でも来て、デートしちゃつたりとか。

高野 はい。

酒井 曖昧化とじらしによつて、始の欲望を高めていくのは、石川県に連れて行くためではないかと思つていますが。石川県での二人の関係性は、この作品の後のストーリーに決定的な意味を持ちますね。

高野 はい。

酒井 石川県での一連の島本さんの言動は、すべて演技だと、私は読んでいて。一番重要な演技は、始に死の深淵を覗き込ませる演技でしょうが、彼女は始をそこに連れ出す前に、死の深淵の手前にある欲望に火をつける演技をします。島本さんは、死の擬態をとることによつて、始から、口移しに薬を飲ませてもらい、そして、肩を抱いてもらいます。これは、小学生のとき、始の心を決定的に捉えた演技と同じ効果をねらつてなされていると思います。小学六年生の島本さんは、ごく自然な成り行きで、始と手を取り合うことによつて、始の心に永遠の女性としての自分を植えつけています。石川県での彼女は、もはや大人ですから、もっと強度な刺激で、始の心を惹きつけるのですが。しかし、

これが、小学生のとき、手を取り合った場面の再現であることは確かだと思えます。始の心を決定的に自分に傾斜させておいて、島本さんは、またぱつと始の前から消えちゃうわけです。始の欲望を、かき立てる効果を計算しつくしています。めったに來ない、つまり、間隔をあげることで、始の中で、余計に夢の女、幻想の女として、膨らんでいくという仕掛けになっているから。

高野 ええ。

酒井 島本さんは現実の女ではない身振りをし、謎めかす、……

高野 あと、やっぱり、始の鈍感さが、……

酒井 ドンカン？

高野 鈍感さですね。

酒井 ああ、鈍感ね。

高野 鈍感というのか、自己中心的というのか。始は、それだけ、島本さんのことを何度も何度も思い出して、生きて行く中で、島本さんを回想することで乗り越えてきて、その記憶が、とつても大事だったにもかかわらず、島本さんと再会した後に、書かれているのが、「彼女は僕のことを自分にとつてのただ一人の友だちだと言った。僕はそれを聞いてとても嬉しかった。僕らはまたもう一度友だちになれるだろうと思つた。」って。始は、友だちつていう言葉を、まづ使うんですね、三十半ばを過ぎた男と女が、再会して。

酒井 双方がね。

高野 ええ。始くんは、いろんなことを話したかつた、とか言つて、目の前にいる、三十を過ぎて、いろいろな経験をしてきた美しい女性に対して、その人生を思うのでもなく、大人同士の再会にときめくのもなく、十一歳のときの、

たった一人の友だちである、島本さんと再会した、というふうにしから認識していない。で、そのあと、今度は、島本さんが、焦らすというか、少し時間を空けたりすることによって、もう二度と、彼女に、会えないかもしれない、つていうような気持ちも、始に抱かせて、それで、ようやく、始は、大人の女として島本さんを見る様になります。それからですよ、今、先生がおっしゃったように、島本さんは、あなたの話を聞かせて、とか、色んな手練手管（笑）を用いて、始の今までの人生を、さかんに語らせていくのは。どんどん、深みにはまるといふか、いわゆる、男と女の物語になっていくわけですが。私が、始が鈍感だっけと思うのは、始が、島本さんと再会したとき、彼が思ったのが、あのころの、十一歳の男の子と十一歳の女の子の關係のように、島本さんといふ友だちになれるかもしれない、なんて、のんきに思っている。そういうところなんです、始が、自分のことしか考えていないなって、思うのは。もういい年なのに、そんなことを、本気で思っているわけだ、この人って（笑）、あきれるというか。ですから、始にとっては、ここで、最初に言った、冒頭の二人の十一歳の出会いの場面が、現実よりも、生々しいような感じですよ。時系列を飛び越えて、現実よりも記憶の映像に、焦点があつているように思えます。

酒井 うん。

高野 で、それを、島本さんが、……

酒井 それは、石川県に行く前ですかね？

高野 ええ。最初に再会して、二度目に島本さんが店に来る前に、……

酒井 それは、だけど、十二歳のときに、手を十秒間だけ、つないだだけの關係ですから。当然、恋人だなんて、始は思えないですね。渋谷で見かけたときも、島本さんと確信がもてなかった。二十四年ぶりに、目の前に島本さんが現れても、十二歳のときに、十秒だけ手を握った相手に過ぎないわけですから。好きだと告白してもいなければ、告白

されてもいないんだから。齡は三十六になつていても、友だちとしか表現できないでしょう。

高野 確かに、友だちとしか言えない關係です。でも、友だちという表現では、済ませられないぐらい、大事な存在だった

わけじゃないですか、彼にとっては。彼の幻想、記憶の中には、いつも、島本さんがいてくれて、「僕」を癒してくれる、救ってくれるって、言っているわけだから。だから、そういう人も、友だちとしか言えないっていうのが、始の、……

酒井 島本さんが店に現れたあと、主人公の始が、彼女のことを友だちと思つてしているっていうことは、すごく重要だつて、

今、高野さんの話を聞いていて、思つただけだ。

高野 はい。

酒井 島本さんは、中学生や高校生のころの男の子が好きになれなかった、と言いますね。その年頃の男の子、つまり

十六、七の、青年期前期の男の子っていうのは、「女の子のスカートの下に手を入れることしか頭がない」がさつな存在だから、嫌いだったんだつて、言つて。

高野 ええ。

酒井 「今のあなたは女の子のスカートの下に手を入れる以外のことだつて考えられるでしょう？」つて島本さんから言われて、「少しはね」とか言つて。

高野 はい、そうですね。

酒井 ですから、島本さんは、私たち良かったんじゃないつて、つまり、十二歳のとき別れて、三十六歳でまた会うつていうのは、がさつな時期の始を二人の間から消去できたわけですね。ですから、キーワードは、性欲ですよ。十二歳のときの始が、正確な意味での性欲をもたない少年だった、つて言っているように、性欲というものを、明確に持たずに、異性と接するときには、やっぱり友だちなんでしょうから。おそらく、始は、少女の島本さんとソファに並ん

で座って、意識的には性欲を介さないで音楽を聴いていたわけで。友だちとしての島本さんと、……。だから、大人になつた島本さんと、最初は、対等な大人の男女の關係を持つというよりは、お友だち、……。少女の島本さんと友だちだった、その島本さんが絶対化されて、そのイメージが頭にインプットされて、その幻想を追い求めているわけだから、……。目の前に現れた、すごく美しい大人の女性になつている島本さんに対して、スカートの下に手を入れる以外のことも考えられる始は、そういう意味では、やっぱり、小学生のとき一緒に居間にいたときのようものを求めていて。その後の島本さんのほうも、小学生のときに始との間にあつたような親密さを求めていた、と言っています。二人は、それを願っているのか、……

高野 私は、二人がつていうより、……。それに、たとえば始は、それを願っているのかつていうと……

酒井 願っているというのは正確ではなく、おそらく、二人は、お互いが幻想の男／女でなくなることを恐れて、大人の性欲が発動することを回避しようとしているのだと思います。といいますのは、十二歳のとき、握り合つた島本さんの手から得たもの、……。始は、きつとそこへ行きつくに違いない、と予感して、胸が苦しくなつたと言っています。それは、性愛關係の始発点に立つた不安感と期待感で、作品のストーリーは、箱根の別荘の結末のところに向かつて、否応無く、前に前に、そこに行きつくように進んでいるわけだから。

高野 その、始の自己中心的な思いが、まずあつて、それが先なんだろうと、私は思っているんですね。あの、やっぱり島本さんには、始が望んだように、欲求通りに、登場してもらいたかつたと思つて、始としては。ですから、今、先生がおつしやつたように、異性愛は、常に性愛關係を抜きにしては語れないわけですが、このときの始は、島本さんとの關係を、確かに男と女なんだけど、イズミのような、破滅的な性愛を介在したものではなく、うっとり音楽を聴いて、文学の話を、並んで座つてするような、そういうものとして、望んでいたんだろうと思つて、実際

の快樂よりも、まだ見ぬ、その先には、きっと何かがあるんだって、思わせてくれるだけでいいんですよ、きっと、始は。いつまでも、その、この先には何があるんだろうって、思わせてくれる、夢みさせてくれる。そういう女性が、始は、欲しかったんだろうって、私は思います。現実での、妻である有紀子などとは違う、そういう……。お金持ちのお父さんがいて、子どもを産んで育てている有紀子のような女、ではなくて。そういう現実と対極にいる、裏側にいるっていうのかな、……、そういう存在であろう島本さんに、自分を、どっかに連れて行って欲しかったんだろうと思います。私は、それは、最終的には、島本さんは、始を死へと、いざなう役割を、始から与えられたって感じています。まあ、物語としては、大人の、三十六歳の島本さんと始は、異性愛の、身体の快樂へと、男女の性的な関係性へと、進んでいきますけど。

酒井

それは書き方としてそうなっていて、十二歳のときは、ナット・キング・コールの「国境の南」を聞きつつ、島本さんがソファに膝を揃えて座っていて、スカートの格子柄の上を手でなぞっていて、始は身体の中に甘い疼きみたいなものを感じていて。

高野

ええ。

酒井

後で、島本さんが始に言うんだけど、あのとときから、私は、もうあなたに裸になって抱かれることを夢見ていたんだ、と。ですから、島本さんが、一貫して、主人公を、誘導して、箱根の別荘での夜の一体化という終局点に誘っているわけですね。店に来て、わざとしばらく来ないでいて、始の好奇心、あこがれを、よりかき立てて、石川県へ行って、ある程度、肉体的接触があって、余計欲望を高めて、そしてまた消えちゃうっていうようにして。そして、箱根の別荘に誘うんだけど。一貫にして、この作品のストーリーは、島本さんがスカートの格子柄をなぞって、主人公に植えつけた疼きの再現に向かって、不可逆的に進んでいます。

高野 はい、そうなんですよね。

酒井 うん。

高野 その、始が、求めていたものっていうのは、結局何だったのかっていうことに、なるんだと思うんですけど。

酒井 この結末っていうのは、主人公が、望んでいたことなのか、やむなくっていうか、巻き込まれたのか……

高野 そこにしか、行く所がないっていう状況になっていったんだと思います。

酒井 始は、箱根の別荘に行っても、十二歳のときと同じように、ソファに座って、同じ方向を向いて、ナット・キング・

コールの「国境の南」を聴いていようとしていた、案外、……。そのレコードを聞こうと行って行ったんであって、本当に聞くだけのつもりだった、っていうことはないですか？

高野 それは、ないんじゃないかと、……。その前に、もう有紀子のことなんか、全然考えられなくて、島本さんのことしか、考えられないような状態になっていたので。

酒井 まあ、そうでしょうね。有紀子は形代の位置に後退していますね。島本さんのことを考えながら有紀子を抱いた、とか、島本さんのイメージを持ったまま有紀子の中に入っていた、っていうように、有紀子が形代に過ぎないことを始は繰り返し語っていますね。島本さんの幻想を守る為には、実際には触れてはならない、島本さんをイメージのままに保つために、有紀子という生身の肉体を借りている。実際には有紀子の身体を抱くんだけど、島本さんのイメージと交わっているというか。

高野 ええ。

酒井 有紀子と現実に関わることによって、島本さんの幻影を、幻影として保つことが可能になっているわけだから。

高野 はい、それはあると思います。有紀子がいるからこそ、イズミも島本さんも、登場してきたと思います。

酒井 だから、箱根の別荘に行つて、始のほうか、島本さんと身体的に交わろうとしていたつていうのは疑問ですね。始は音楽を本当に聞くだけのために行つたと考えてはいけけないのか、……

高野 あの、島本さんは、死のイメージをいつも連れていきますよね。石川県の川に行つたときにも、自分の現実の世界、生きている、生活のことには、ほとんど触れないで、ほんとかどうかわからないにしろ、自分の死んだ子どもの灰を川に流すつていう、いわゆる、喪の儀式、葬式みたいなものに、始を立ち会わせるし。そして、そのとき、自分自身も、あたかも死体のような姿をさらすわけですが。

酒井 うん。死の擬態というかね。島本さんは、一貫して、主人公に死を垣間見させ、もつと言えば、彼女が死者であることをわからせようとしているのだと思います。箱根へ行くときですら、始が運転しているハンドルをぐつと回したら、死んじやうでしようね、とか言つて、……

高野 そうなんです。始も、島本さんのことばかり考えていて、現実の、夫であり父親である生活は、もうこのままでは、やつていけないつていう状態になつてきて。そのとき、島本さんは、どっちかを、……、あの、こっちか、そっちか、どちらかを選ぶのよ、つて言いますよね。

酒井 うん、うん。私には中間というものは存在しないのよ、つてね。

高野 はい、中間は無いのよつて言つて。それは、私は、島本さんに仮託された、始の内なる声なんじゃないかつて思うんですけれど。ある種、死への願望みたいな、その、現実から逃れたいつていうような、……

酒井 島本さんが、「私を全部取るか、それとも私を取らないか、そのどちらかしかないの」と言つているのは、Aという女か、Bという女か、つまり、有紀子か島本さんかという、二者択一を迫つているようであり、その実、生か死の選択を迫つているのですね。有紀子を選ぶつていうのは、現実に残まるつていうことで、島本さんという幻想を取るとい

ことは、それは、やっぱり死の世界に飛び込むことで、……

高野 もしくは、破滅ですよね……

酒井 破滅か、……。この作品の二人が箱根に行くところは、えーと、何と言いましたっけ、心中、……

高野 道行、ですか？

酒井 ああ、道行き。恋の道行。死出の旅をしているようなところがあつて。

高野 ええ、ありますね、そういう雰囲気。あの、それは、『ノルウェイの森』にも、ありますね。必ず、春樹の作品には出てきますね。

酒井 ああ。

高野 あの、これは日本の文学では、古典でも、『雨月』にしる『源氏』にしる、そういう場面が……

酒井 うん、……

高野 『浅茅生の宿』とかですよ。森の中とか、山を越えるとか、つづら折りの道を行くと、そこに、……

酒井 そうですね。なにしろ箱根ですからね。

高野 箱根、と言えぱつていう、前提がありますよね。箱根の、山の中、森の中を、ひたすら進んで行くと、別荘が、……別荘より廃屋の方がいいですけど（笑）。そこで、死者と出会う、交わるつていうようなイメージが浮かびます。あの、『ノルウェイの森』の阿美寮なんかも、くねくねと山道を行くと、そこに忽然と現れる感じだし、漱石にもありますね、山を越えていくと、そこに綺麗な女の人が出て……

酒井 『草枕』ですね。那美さんがいてね。那美さんも死を口にしたたり、死の擬態をとつたりします。

高野 そういう系譜の中にあると思います、この箱根の別荘も。ですから、もうそこには、死、もしくは破滅しか、なかつ

たんじやないんでしょうか。だけど、結局、始は生き残って、島本さんが、一人で、そういう暗くて寂しくて悲しいものを、全部、抱えて、持って、消えてしまったわけです。

酒井 この辺を、だから、春樹の作品だと思って読まなければね、単に、まあ、『失樂園』かなにかの作品のようにね、……
高野 ええ。

酒井 不倫に陥った男女がね、もう、生きていられないなんて感じで……。生きていられないから、もう、死にましよう、っていう旅をしているみたいな、そういう雰囲気を持って、箱根へ行く。

高野 はい。

酒井 で、島本さんが、中間は無いのって言って。「だからあなたには私を全部取るか、それとも私を取らないか、そのどちらかしかないの」と言いますよね。これは、有紀子か島本さんかのどちらかを選択しろと迫っているように、実際には、生きるか死ぬか、っていう選択を迫っているように。

高野 ええ。

酒井 漱石の『夢十夜』の「第一夜」の女が、男に、百年待っていてください、きつと逢いに来ますから、と言う。男は、待っている、と答えて、女の墓の傍で百年待っています。女が百年経ったら逢いに来る、と言ったのは、男が死ぬば逢える、ということだ、という説があります。『国境の南、太陽の西』の島本さんも結局は同じ要求をしているのだと思います。箱根に行く途中でも、島本さんが、始が運転しているハンドルの手を伸ばして回したら、死んじやうでしようね、と言って、死の世界にジャンプしようとしているのに、始は、そういうのは素敵な死に方じやないな、と言って、死を回避しますよね。

高野 はい。

酒井 それがまあ、島本さんと真に一体化できない理由である、つまり、死者である島本さんと世界を異にしちゃう。だから、箱根の夜の交わりの翌朝の、島本さんがいないという、現実になるのか。あそこで、一緒に死のうと言えはよかつたのか、……。

高野 そうですね、……、まあ、でも、始の答えは、島本さんからしてみたら、最悪だったんじゃないかと思えますけど（笑）。「私と一緒にここで死ぬのは嫌？」って聞かれて、『そういうのはあまり素敵な死に方じゃないな』と僕は笑って言った。」わけですからね。質問に答えていない。はぐらかしていて、ここでも、始くんは。自分からは、大事なことは何も言わないです。始は、島本さんによつて、死、現実の外側つて言つてもいいかもしれません、そちらへと向かっていることは、確かだと思えます。そして、それは、島本さんが誘っている、案内しているように見えます。でも、実際は、始が、それを望んでいる。そして、誰かに連れて行つて欲しい、連れ出して欲しいつて願っている。始の、それは、まあ、無意識というか、潜在意識があつて、島本さんとイズミを、記憶の中から呼び起こして、始めが、その役割を、彼女らに担わせているように、私は感じます。だから、あの、最後の島本さんが、明日全部話すわ、つて言つて消えたつていうのが、……

酒井 うん。

高野 これも、なんて始にとつて都合のいい話なんだろうかつて（笑）、思うんです。始は、その、明日の朝には、島本さんを失うので、もう有紀子のところへ帰るしかなくなるわけ。

酒井 うん、……

高野 一人では始は、きっと死ねないので。

酒井 ただ、作品の結末で、始が有紀子のところへ帰るといふよりは、島本さんが消えることで、やっぱり、始の中で、

幻想の島本さんっていうのは、消えないかもしれない、……。

高野 はい。

酒井 と、読むのか……。とにかく、この結末のところは、春樹がイメージしていたとは、私には断言できないんですけど、ギリシア神話のナルシスをふまえているように思えるのですが。島本さんっていうのは、始のナルシズムが創り出した自己像で、泉に映っている自分の姿に恋しちゃっているわけです。

高野 ええ。

酒井 島本さんっていうのは、始が創り出した、ある意味、幻想だから、始の自己愛的な像であって。で、結末の箱根での同一化、肉体的な交わりというのは、ナルシスが、水に映っている自己像に恋焦がれて、口づけしようとしたり、抱きしめようとしたりして、水をかき回したとき、像が消えちゃうっていうことを意味しているんじゃないですかね。つまり、一体化したら、泉の姿は消えてしまうように、一体化したから島本さんが消えた。

高野 私は、最初から、消えるべき存在として、彼女はいたんだらうと、思うんですけど。

酒井 消えるべくして、っていうのは、つまり、始の造り出したイメージでしかないわけだから？……

高野 そうです。そのうえで、始を、なんていうか、一つに統合するためには、島本さんが消えるしか、なかったらうって、思うんです。いつまでも、始の前にいるのは、無理っていうか、……。あの、最後の、箱根の別荘での、いかにもおかしな、二人の身体的結合は、……。なんだろうこれは、って言いたくなるような交わり方で、……。確か、「これは儀式なのよ」って言ったと思うんですけど、……

酒井 うん、言いますね。必要だったのってね。

高野 ええ。だから、先生がおっしゃったみたいに、始と島本さんが、一体化するというか、島本さんが始の中に取り込

まれるっていうか、……。始は、今、錯乱の中にいるっていうか、死ぬにしろ、今の自分を生きていくにしろ、一人では、同じところをぐるぐる回っているだけで、どこにも出口はない状態ですよ。だから、島本さんを求めて、……。先導者というか、巫女というか、……。一人じゃできないんですよ、決められない、断念することができない、始は。だから、うまく言えないんですけど、あれもこれも、どれ一つ選べない、捨てられない、今の自分を、まとめるために、または、今まで構築してきた自分というものから、脱するために、島本さんを、必要とした。そして、二人は、男／女として、異性として、設定されていますから、その二人が、一つに統合される、一体になるっていうのが、あの儀式めいた、あんなおかしな形で、ある種オカルトめいた行為なのではないかと、私は思います。今、先生がおっしゃったみたいに、島本さんには、始が、こうありたい、こうあるはずだって思っている自分が、自己像が、異性である島本さんに反映されているっていうことは、間違いないですよ。

酒井 ええ、そうですね。

高野 それが、その、十一歳ぐらいのとき、小学校高学年で、自意識が芽生えてきて、……。始が、盛んに自分が一人っ子だということにこだわり始めて。それは、あの、最初にも話したんですけど、自分が、ちよつと他の人と違う、特殊である、どこか欠落しているっていう自己認識が生じて。それが、一人っ子だからだっていうふうな、……。一種の印ですよ、始にとつての。でも、実際、他者から見たときの始は、確かに、ちよつとは変わった子どもだったかもしれないけど、でも、男の子で、両親揃っていて、お父さんはきちんとした所にお勤めしていて、社宅に住んでいる。みんな、一軒家に住んでいるようなところだった、なんて、しれつと言っているわけですからね(笑)。

酒井 うん。

高野 ですから、それほど大きな欠損は、見られないですよ。でも、自分は、どこか欠落しているんだ、と思っていた、

思いたかった始が、見つけた女性が、足が悪かったという。そういう、はっきりとした印を、刻印された島本さんだったわけです。

酒井 足がね、悪い女性ね。

高野 女性というのは、ペニスが無い人間だっていう、男ではないという、印がつけられていると、ジェンダー論では、言われますけど。まさに、欠損、不完全さというものが、目に見える形で、島本さんは造形されています。だけど、綺麗で、頭がよくて、性格がよくて、……

酒井 フロイトがね、言っているよね。

高野 はい。そういう女性として、小学生のときに登場する。春樹の書き方は、巧みだなんて思いますね。どんなに自分のことを、ちよつと変わっている、欠落していると思っても、男性ジェンダーである始と、美人で頭がよくて、良いところのお嬢さんだけでも、あきらかに足をひきずる女の子、女性ジェンダーである島本さん。この二人の描きかたが、対比というか、その差異が、リアルだなんて思います。自分のことを、どこか欠落している、自分は他の人とは違つて、始が言えば言うほど、島本さんの、欠落したもの、最初から失われていたものが、その哀れさっていうか、苛酷さっていうか、迫ってくるように感じるんです。その、島本さんを、「僕」を癒してくれるんだ、「僕」の大事な人なんだって、始が無邪気に言いますよね。それは、不完全な者が、幻想の不完全さを夢見て、もつと不完全で傷ついている者に、すがつて支えてもらおうとしている姿だと、私には見えるんです。この小説は、こういう、始の鈍感さっていうか、これは、世の中すべて、人の世の鈍感さだと思うんですけど、残酷な、醜悪な、鈍感さのはっきり描かれていると思います。そこがすごいと思いますね。そして、私が、思うのは、何より、そういう男たちの欲望を、社会のつて言ってもいいかもしれないですけど、担うために、欠落した、不完全な存在として形作られた、女性ジェン

ダー、島本さんの、人生のむごさのようなものです。それを、感じずにはいられないです。

酒井 うん。

高野 最後に、「明日なんか来なければいいのに」って言って、消えるしかなかった島本さんが、哀れで哀れで。なんだかんだ言って、始は生き残って、島本さんといえ、始を生き延びさせるために、最初からいなくなつたみたいに、無の存在に収斂されてしまった。そんな島本さんが、私はかわいそうでなりません。そして、そう感じさせるように、春樹が、書いてあるって、思うんです。春樹は、こういうところが、巧みだと思います。男／女の在り様っていうか、現実のジェンダー差異を、ちゃんと提示している。決して声高にならないように。うまいですね（笑）。

酒井 とここで、まあ、そろそろ、この章もまとめなければならぬですけど、どうしても、話してみたい誘惑にかられるのは、やっぱり、島本さんという女性は、現実に、ほんとうにいたのかっていうのが、やっぱり、私には、どうしても問題になって。

高野 はい。

酒井 というのは、その、二十八歳のとき、渋谷で、始が、島本さんだと思えない女性を追っかけたわけですが、店に現れた島本さんが、「どうしてあのとき、私を追いかけたの」って言っていることは、あれは、現実の島本さんだった、と読むしかないんだけども。

高野 ええ。

酒井 一方で、でも、タクシーに乗ろうとした島本さんに声をかけようとして、誰かに肘をつかまれて、その男から十万円が入った封筒を渡されていたはずなのに、作品の結末では、その封筒が無いということが明かされます。そのことによって春樹が表現しているのは、渋谷の街にそのとき島本さんはいなかった、始の創り出した幻想だった、とい

うふうに読める。そういうふうには、遡っていくと、じゃあ、始が最初にかかわった、十二歳のときの、一〇〇パーセントの理想の女の子である島本さんは、そもそもいたのかっていうことになってくる。

高野 はい、はい。

酒井 それが一つと。その、やっぱり、三十四にもなって足の手術をしたという不自然さ、それは二十何年もたって、医学が進歩したから可能になった手術、と言ってしまったえばそれまでですけど、……。三十四歳か何かで足を治すっていうのが、……。三十二歳でしたっけ？

高野 そうですね。

酒井 四年前に治したって。

高野 ええ。

酒井 これも、不自然なものを感じて。そもそも島本さんはいたのかっていうのと、店に現れた島本さんは、本当に現実の島本さんだったのか、っていうのが、……。この辺りのことは、春樹がわからさまに書いているので、多くの人が気づいていることでしょうが。雨の降る日、夜、しかも、前髪から水が滴っているとかな。

高野 髪が濡れていたって、わざわざ書いてありますものね。

酒井 石川県から帰るところで、青山一丁目の墓地のところを下ろしてくれと言ったり。

高野 はい。

酒井 足が治ったっていうのも、幽霊だったら、足を引きずる必要がないですからね。足が無いからね。そんなふうには、読者が、多義的に読めるように島本さんは造形されています。始が創り出した幻想、つまり、どこにも存在しない女性、……。その、どこにもいないっていうのは、島本さんっていう女の子はいたかもしれないけど、パーフェクトの、

一〇〇パーセントの女の子っていうのは、創り出した幻想に過ぎないっていう意味での幻想ですよ。

高野 はい。

酒井

幽霊という、現実には非存在の存在、あるいは、現実には非存在の一〇〇パーセントの理想の女の子、そのどちらにも決定不可能な島本さん。その辺が、この作品の面白さっていうか、……。

高野

そうですね。あの、それは、春樹がよくやる手法で、こんなの純文学じゃない、って、わざと、思わせて響塵をかうために、やっているのではないのかと(笑)、……

酒井

うん。

高野

あの、怪談話っぽくしてみたり、SFっぽい設定をもってきたり。そういう仕掛けを、春樹はよく使いますけど。絶対、深刻にならないように、……。いわゆる、純文学的に読まれないように、明治以降の自然主義文学のように、ならないように、わざとしているように、私は感じるんです。だから、この小説も、読み物として、どんどん読めるで、え、なんだろう、これ？ って、思っちゃう。例えば、島本さんって、いったいなんなの？ って、どういうこと、これって？ っていう感じで、読み進めることが容易いです。ところが、一方、読み手に、島本さんの存在感が、とっても大きく残るって感じるんです。その、島本さんの、生きることの過酷さが、いわゆる自然主義的な、悲惨な事実の告白よりも、ずっと、こう、伝わってくるっていうか。そして、人というものは、あるいは、女性ジェンダーとは、どういう存在で、どんな風に生きているのだろうか、読者に、そこまで思いめぐらせる力が、この作品にはあると、私は、思うんです。それが、すごいなって、さすが、世界の村上春樹(笑) って、今回、改めて思ったんですけど。さっき話した、道行を連想させるとか、怪談話のようなところとか、そういう、日本人が親和性を感じるものを、ほんとうに、上手に、用いていて。